

# 子どもが主体的に問題解決に取り組む社会科学学習の構想

## ～学習問題とカリキュラム・デザインの工夫をとおして～

中山 和幸

文部科学省から主体的・対話的で深い学びが授業改善の視点として明示され、そのような視点での授業改善が各校で行われている。その中で小学校社会科では、主体的な学習として、追究が「自分ごと」になることをめざした実践が数多く行われてきた。本研究では、そのような「追究が自分ごとになっている学習」を実現するために、オーセンティックな学習問題の設定と他教科等横断のカリキュラム・デザインによる効果を検証した。その結果、オーセンティックな学習問題の設定と他教科等横断のカリキュラム・デザインは、子どもたちが追究を自分ごとにし、問題解決に取り組むことに有効であった。

キーワード：オーセンティックな学習問題、カリキュラム・デザイン、他教科等横断、自分ごと

### 1. 研究の目的

本研究は、子どもが主体的に問題解決に取り組む社会科学学習の構想を目的に、小学校第3学年社会科「わたしたちのくらしと漬物工場ではたらく人々」の単元を中心に実践したものである。「子どもが主体的に問題解決に取り組む姿」を「社会的な事象の追究を自分事ごとにしていく姿」と定義し、「学習問題」と「カリキュラム・デザイン」の2つを学習構想の視点としながら、定義したような子どもの姿を具現化するために必要な授業の要件を明らかにすることを目的とする。

#### 1. 1. 研究主題設定の理由

研究の目的として「子どもが主体的に問題解決に取り組む社会科学学習構想」を掲げた理由は以下である。

##### 1. 1. 1. 学校提案とのかかわり

本校では、未来に生きて働く資質・能力の育成を研究主題に掲げ、具体的には「探究力」と「省察性」といった2つの資質・能力の育成をめざしている。

また、この2つの資質・能力を育成するために「探究的な学び」を実現する必要があると考えている。ここで言う「探究的な学び」が実現されているかどうかを見取る視点として、本校においては「主体」「協働」「活用」「省察」の4つの視点を大切にしている(表1)。

表1 探究的な学びの視点と子どもたちの姿

探究的な学びの視点	子どもたちの姿
主体	・学習に没頭している。 ・自ら問題解決に取り組んでいる。
活用	・過去の学習(内容、方法、経験)を用いて、考えている。

協働	・他者(自分以外のすべての他者を想定)と力を合わせて学んでいる。
省察	・自他を理解する。 ・学習を見通したり、振り返ったりして、調整する。

これら4つのうち最も重要な視点が、子どもたちの学習の原動力にかかわる「主体」である。子どもたちが解決したい問題と出合い、問題を解決する過程があるからこそ、他者と「協働」し、知識・技能を「活用」し、思慮深く自らの問題解決について「省察」する姿が表れてくると考えるからである。

このような意味で、本校の研究において「主体」が大変重要な視点であり、子どもが主体的に問題解決に取り組む学習を実現させていく必要がある。

### 2. 研究仮説

子どもが解決したいと思うオーセンティックな学習問題を設定し、教科等横断の視点をもってカリキュラム・デザインの工夫を行えば、子どもが主体的に問題解決に取り組むであろう。

### 3. 研究内容・方法

#### 3. 1. オーセンティックな学習問題の設定

奈須(2017)は、「具体的な文脈や状況を豊かに含み込んだ本物の社会的実践への参画として学びをデザインしてやれば、学び取られた知識も本物となり、現実の問題解決に生きて働くというのがオーセンティックな(真正の、本物の)学びの基本的な考え方であること」と述べている。また、「学びの文脈が本物でありさえすれば、子どもは具体的な経験や生活実感など、思考を巡らす足場となるインフォーマルな知識を豊かに

所有しており、それらを駆使することで、自分に引き付けての思考や判断を進めることができること」も述べている。

本実践においては、奈須（2017）にある「現実の問題解決に生きて働く」、「自分に引き付けての思考や判断を進めることができる」という点に注目する。これらの事柄は社会科において重要となる「自分ごとになる」ということに大きく関わるものであり、子どもが主体的に学習に取り組むための手立てと成り得ると考える。

本実践において、地域に実在する課題を教材化し、「オーセンティックな学習問題」を学習に位置付けることで、子どもたちが自分に引き付けて思考し、自分なりの見方・考え方を働かせながら、本気で学習に向かう姿を具現化できると考える。

また、本校社会科部では、子どもが地域の学習対象と出会い、その対象についてくわしく考察する過程を「社会を考察する過程」、また、「地域の学習対象について考察する中で出会う、新たな地域の問題の解決方法を考察し、自己の生き方や社会の在り方を構想する過程」を「構想の過程」と呼び、これら2つの学習過程を単元の中に位置付けることを大切にしている（図1）。

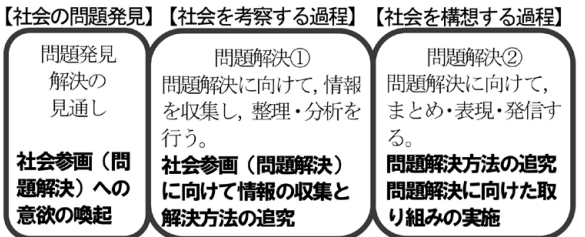


図1 本校社会科部が提案する社会科における学習過程

本実践においては、これら2つの学習過程に対応するかたちでオーセンティックな学習問題を設定する（表2）。

表2 2つの学習過程における学習問題

学習過程	学習問題
考察	漬物工場Kの漬物はどうやってつくられているか。
構想	どうすれば、附属っ子たちの漬物離れを止められるか。

3. 2. 他教科等横断の視点を生かした  
カリキュラム・デザインの工夫

本実践においては、「漬物」や「伝統」といった子どもにとって身近でないものを学習材として取り上げている。そのため、十数時間の社会科の学習のみで「漬物」や「伝統」についての社会認識を深めていくのは難しい。この問題を解消するために、本実践の単元構成においては、他教科等横断の視点をもち、特別の教科道徳や特別活動の学習で学んだ価値や知識を活用し、

社会科の学習を進めることができるようにする。また、実際に他教科等で学んだどのような価値や知識が社会科の学習に活用されるのかを具体的に想定しておく（表3）。

表3 社会科に生かされる他教科等の学び

特別の教科道徳	・ 伝統を守り、受け継ぐことの価値
特別活動	・ 漬物づくりをとおして得た知識 ・ 和歌山市で昔からつくられてきた漬物（紀の川漬け）の歴史にかかわる知識

3. 3. 研究方法

仮説の検証授業を行い、「子どもが主体的に問題解決に取り組む姿」である「社会的な事象の追究を自分事ごとにしていく姿」を授業記録及び子どもの表現物（ノート記述）から捉えることで、研究内容①「オーセンティックな学習問題の設定」や研究内容②「カリキュラム・デザインの工夫」の効果があつたどうかを検証し、主体的に問題解決に取り組む姿を具現化するために必要な授業の要件を明らかにする。

4. 授業の実際と考察

《単元について》

単元名 「わたしたちの生活と漬物工場ではたらく人々」  
対象児童 和歌山大学教育学部附属小学校3年C組（29名）  
単元計画（社会科全15時間）

一次 漬物づくりについて話し合おう。

- ・ 自身の漬物づくりの体験や県内の漬物の生産量や消費量を知ることから思いや願い、疑問をもつ。①
- ・ 思いや願いの実現、疑問の解決につながる学習問題をつくり、学習計画を立てる。②

二次 漬物づくりについて調査しよう。

- ・ 漬物づくりについて予想する。③
- ・ 工場見学を行い、漬物づくりについて調査する。④⑤
- ・ 気付きや疑問を交流し、漬物づくりについて考察する中で、「漬物離れの問題」に出会う。⑥⑦⑧

三次 漬物離れの解決策を考え、発信しよう。

- ・ 漬物離れ対策を考え、まとめる。⑨⑩⑪
- ・ 漬物工場Kに発信する。⑫
- ・ 対策を練り直し、再び漬物工場Kに発信する。⑬⑭
- ・ 学習の振り返りをする。⑮

#### 4. 1. オーセンティックな学習問題について

《社会科 第2時》

「学習問題を考えよう。」

第1時で、自分たちがつくった紀の川漬けと漬物工場Kがつくった紀の川漬けを食べ比べた子どもたちは以下のような感想をもった。

##### 味について

- ・自分たちの漬物と味がちがうのはなぜだろう？
- ・工場Kの漬物はなぜあまずっぱいのだろう？
- ・上にのっている茶色いものは、漬物に合うのか？

##### 作り方について

- ・何ヶ月くらいつくるのかかるのだろう？
- ・どうやったら、こんなにおいしい漬物ができるのだろう？
- ・つくっている途中で味見はしているのだろうか？
- ・どんな調味料を使っているのだろう？
- ・材料は何だろう？

##### 工夫について

- ・何を大事にして作っているのだろう？
- ・かくし味は何だろう？

##### 商品について

- ・ちがう種類の漬物はあるのだろうか？

このように、味、におい、作り方、工夫、商品、産地など様々な視点で子どもたちから「疑問」が出てきた。最終的に、みんなの疑問を解決できるような学習問題を考え以下の学習問題を設定した。

##### 学習問題 1（考察の過程の学習問題）

工場Kの漬物はどうやってつくっているか？

《社会科 第6時》

「工場Kのつけものはどうやってつくられているか。まとめをしよう。」

第4. 5時で工場見学を行い（図2. 3）、第6時は、子どもたちが工場Kの見学をとおして、学んだことを共有した。

子どもたちからは、学んできたことがたくさん出された。漬物づくりの各工程における工夫点を共有し、漬物工場の人々の想いや願いに迫ることができた。

つけもの工場Kの人たちは、お客さんに喜んで食べてもらえる漬物をつくるために「おいしさ」、「安全」、「伝統」、「新しさ」、「環境」のことを大事にしながら漬物づくりを進めているこ

とに気づき、自分たちが安心して、漬物を食べられるのは、漬物工場の人たちのこのような努力のおかげであることに気付く1時間となった。



図2 工場Kの方の話を聞く子どもたち



図3 漬物工場Kの紀の川漬けを試食する子どもたち

《社会科 第8時》

第8時は、次のようなメール（図4）を子どもたちに見せた。

3Cのみなさん「漬物離れ」って聞いたことはありますか？  
今の時代、本当に日本人の漬物離れが進んでいます。  
20年前の漬物市場は5,000億円ほどありましたが、現在では3,500億円にまで落ちています。  
一生懸命いろいろな工夫をして漬物をつくっても、買ってもらえない。食べてもらえないでは、とても残念です。  
漬物は、昔からつくり、人々に食べられてきた昔の人の知恵のつまった伝統ある食べ物です。お客さんが喜んで食べてくれるおいしい漬物を作り続けることで、少しでも多くの人に漬物を食べてほしいと願っています。

附属小学校の3Cのみなさんで「漬物離れの問題」を考えてもらえるととてもうれしいです。  
我々大人では思いつかないこともあるかと思いますが、よい意見があれば参考にさせていただきますのでぜひ、教えて下さい。

図4 工場KのNさんからのメール

子どもたちに、メールを見た感想を訊くと、次のような意見がでた。

- C：3Cを工場Kの人たちが信じてくれた。
- C：昔の人の知恵を受け継ぎたい。
- C：一生懸命工夫してつくった漬物をお客さんに食べてほしい。
- C：すごくいい方法を考えて工場Kを助けたい。
- C：できるだけ解決方法を考えて教えてあげたい。



工場Kの努力に共感しながら、学習を進めてきた子どもたちなので、工場Kを助けたいという想いや願い、そして、漬物ばなれを止めたい、解決したいという想いや願いをもった。

そのような想いや願いを生かし、「どうすれば、漬物ばなれを止められるか」という学習問題を設定した。

しかし、その後漬物ばなれを止めるための行動をし、効果があったかどうかを確かめることができるのは、附属小学校の子どもたちとその友達だということになり、学習問題を以下のように少し変更し、設定し直した。

#### 学習問題2（構想の過程の学習問題）

「どうすれば、附属っ子たちの漬物ばなれを止められるか？」

第8時から第9時の間に、全校児童にアンケートを実施、加えて、家族や他の学校の友達にもアンケートを実施。675人のアンケート結果を集計し、第9時を迎えた。

### 4.2. オーセンティックな学習問題の設定にかかわる考察

オーセンティックな学習問題は、本実践においては、奈須（2017）にある「現実の問題解決に生きて働く」、「自分に引き付けての思考や判断を進めることができる」という点に注目する。これらの事柄は社会科において重要となる「自分事になる」ということに大きく関わることを期待して用いたものであった。

学習問題1「工場Kの漬物はどうやってつくっているか」は、子どもたちの「予想」や「まとめ」の活動を主体的にした。学習問題についての予想では、以下のように子どもたちはたくさんの予想を出した。

- ・きっと、自家製の野菜を使っているだろう。
- ・機械で作っているだろう。
- ・人は、手袋、マスク、エプロンをしているだろう。
- ・大根を「切る」、「皮をむく」、「洗う」はあるだろう。
- ・調味液には1日くらい漬けているだろう。
- ・ほこりやゴミのチェックをしているだろう。
- ・安全点検をしているだろう。
- ・パックに入れたりするだろう。
- ・大根のいらぬ部分も何かに利用しているだろう。
- ・働いている人は家でも漬物をつくっているだろう。
- ・新しい商品を考えているだろう。

また、学習問題1の追究のまとめとなる第6時においても図4からわかるように、子どもたちは、学習問

題をもって、校外学習に行ったからこそ、そこで教わった知識や理解したことを積極的に出し合った様子が窺える。また、子どもたちから出された情報量の多さから校外学習において主体的に学習に取り組み様々な情報を手に入れて帰ってきた様子が窺える（図5）。



図5 第6時の板書

このように、学習問題について、予想する場面、調査する場面、まとめる場面において、子どもたちは自分なりの考えや教わった知識や理解したことなどをたくさんアウトプットできたことから、それまでの過程が充実していたと考える。

したがって、学習問題1「工場Kの漬物はどうやってつくっているか」は、子どもたちが「自分に引き付けての思考や判断を進めることができる」ようにすることを可能にし、追究が「自分事になる」ことに効果があったと考察する。

学習問題2「どうすれば、附属っ子たちの漬物ばなれを止められるか？」の効果についても考察する。

まず、第8時において「（あんなにおいしいのに、あんなに工場の人は工夫や努力をしているのに）どうして、漬物ばなれが起きているのか？」という問いが生まれる姿が窺えた（図6の○部分）。

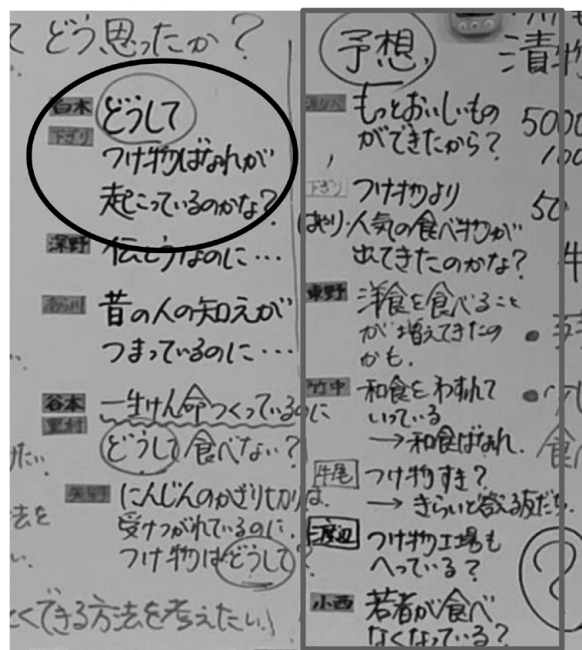


図6 第8時 漬物ばなれが起きている原因の予想

また、生まれた問い「どうして漬物ばなれが起きているのか？」について自分なりに予想を始める姿が

見られた。教師が予想することを促さずとも、予想を始めた姿や自分なりの見方・考え方を働かせながら予想をしている姿から学習問題2「どうすれば、附属っ子たちの漬物ばなれを止められるか?」は、子どもたちに「自分に引き付けての思考や判断を進めること」を可能にし、追究を自分ごとにすることに効果があったと考える。

それから、授業以外の場面においても一部の子どもではあるが、自ら発展的な学習を行い、たくあんのアレンジレシピを考えてくる姿(図7, 8)やたくあんのPRキャラクターを考えてくる姿(図9, 10)などが見られた。

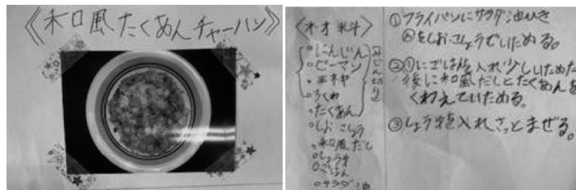


図7 たくあんチャーハン

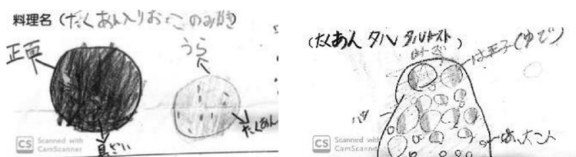


図8 たくあん入りお好み焼きとたくあんタルタルトースト

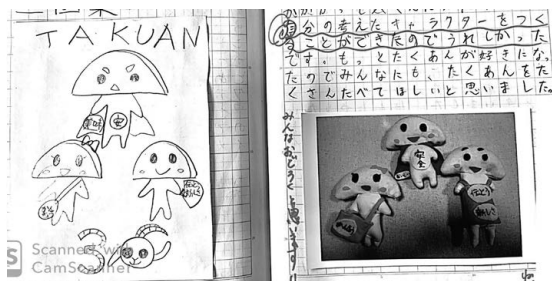


図9 たくあんのPRキャラクター①



図10 たくあんのPRキャラクター②

さらに、学習問題が附属小学校の子どもたちの漬物ばなれを止めることを目的としたものであったため、附属小学校でも漬物ばなれが起きているかどうか

を確かめるためのアンケート（図 11）を実施したり、アンケート結果（図 11, 12）にあった意見から漬物ばなれをとめる作戦を考えたりするなどの主体的な子どもたちの姿が見られた。



図 11 漬物ばなれについてのアンケート（左）とその結果①（右）

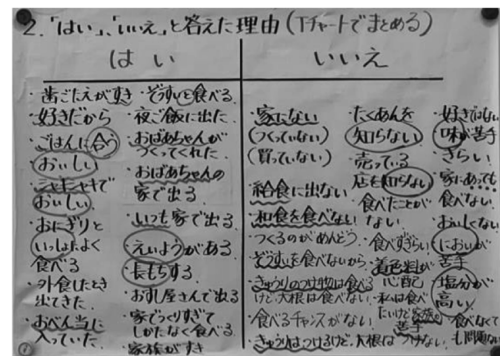


図12 漬物ばなれについてのアンケート結果②

自らすすんでアンケートを作ったり、結果から問題の解決策を考えたりする姿が見られたことから、学習問題2が子どもたちの追究を自分事することに効果があったと考察する。また、附属小学校内に起こっている漬物ばなれを止めるという目的は、子どもたちにとって、何をすればよいのかについて具体的に考えることを可能にし、解決の見通しをもちやすくしたのではないかと考える。解決の見通しをもつことで子どもたちは主体的に動くことができると考えれば、学習問題を設定する際には、子どもが解決の見通しをもつことができるかどうかが大切な視点となるかもしれない。

#### 4. 3. カリキュラム・デザインの工夫について

実践におけるカリキュラム・デザインの工夫は、「漬物」や「伝統」といった子どもにとって身近でないものを学習材となる社会的事象として取り上げているため、十数時間の社会科の学習のみで「漬物」や「伝統」について理解していくのは難しい。3年生の実態を考えると、理解し難いものは身近に感じる事ができないだけでなく、興味や関心も低下していくことが予想



され、主体的に学習に取り組む姿が表れにくいのではないかと考えられることから、これらの問題を解消するために用いたものである。

#### 《特別活動》

##### 「郷土料理について知ろう」

特別活動の時間において「郷土料理について知ろう」の学習を行った。まず、和歌山市では、地理的環境を生かし、昔から漬物づくり（紀の川漬け）が行われてきたことを知った（図 13）。次に、紀の川漬けを実際につくって食べる活動を行った。（図 14, 15）その中で、紀の川漬けをつくる工程を知ったり、紀の川漬けの味を確かめたりすることができた。

また、塩漬けにするのは、塩味を漬物に入れるというだけでなく、長く保存ができるようにするための昔の人の知恵であることやおもりを置いて漬物を押すことにより、水分がたくさん出て、その分味が漬物にしみこんでいくことなどを実体験をとおして、知ることができた。



図 13 和歌山で昔からつくられてきた郷土料理



図 14 自分たちでつくる紀の川漬け①



図 15 自分たちでつくる紀の川漬け②

#### 《特別の教科 道徳》

特別の教科道徳の学習においては、「にんじんのかざり切り」を教材として、伝統を守り、受け継いでいくことの価値を学んだ。

にんじんのかざり切りに見られる、「見た目が美しいだけでなく、味がしみこみやすくなっている」などの昔の人の知恵を具体的に学ぶことをとおして、日本の食文化の一端を知るとともに、昔の人の工夫のすばらしさやそのような工夫を守り、受け継いでいくことの大切さについて学んだ（図 16）。

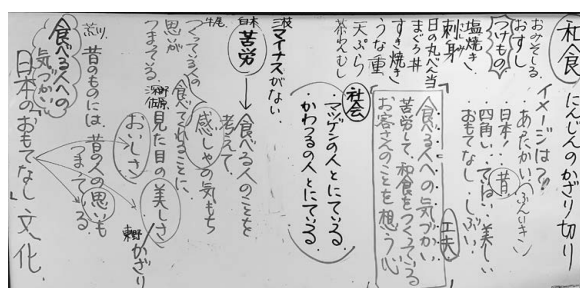


図 16 「にんじんのかざり切り」 板書

#### 4. 4. カリキュラム・デザインの工夫についての考察

カリキュラム・デザインの工夫を行った結果、その効果であると考えられる子どもたちの姿がいくつか見られた。

##### 《社会科 第1時》

「自分たちがつくった紀の川漬けと工場Kの紀の川漬けを食べ比べよう。」

第1時は、特別活動「郷土料理について知ろう」で自分たちがつくった紀の川漬けと漬物工場Kでつくられた紀の川漬けを食べ比べる活動を行った。すると、以下のような発言が子どもたちから出された。

「自分たちがつくった紀の川漬けより、甘くない。」  
「色が自分たちがつくったのより黄色い。」  
「漬物の上ののっている茶色いものは何？」

これらの意見は、味や見た目に着目して、漬物工場Kの漬物と自分たちの漬物を比べた結果であると考ええる。言い換えれば、特別活動において「紀の川漬けづくり」を経験した子どもたちだからこその意見であると考ええる。この点において、教科等横断の視点でカリキュラムのデザインを行うことの利点が表れていると考察する。

同じように漬物工場Kの紀の川づけを食べる活動を行っていても、このような感想や疑問は出て来なかったのではないかと考える。それは、比較する対象がないからである。また、全員が共通体験として、漬物づくりを行っていることで、感想や疑問の共有をしやすくなっていたことも他教科等横断の視点でカリキュラムをデザインをすることの利点である。

#### 《社会科 第10・11時》

「どうすれば、附属っ子たちの漬物ばなれを止められるか？～漬物を食べなくても問題ないって人がいるけど本当に問題ないかな？～」

第10・11時は、附属小学校の子どもたちにとったアンケート結果の中にあった、「漬物を食べなくても別に問題ない」という意見について各々の見方や考え方を意見として出し合った。すると、次のような話し合いの場面があった。

#### （第10時授業記録より）

こうた 洋食とかは流行っているのにさ、和食だけなくなっているって。他のものもなくなっているかわかんけど、和食もなくなっているから。

教 師 日本で和食が食べられなくなってきたって洋食を食べることが多くなってきたってことね。

あかね 前、にんじんのかざり切りってやったやん？あれも和食で、漬物だけがなくなったとしたら、工場Kの人は今まで漬物を苦労しながら作ってきたのに、せっかく作ったのに、自分たちでがんばって作ったものがなくなったりとか、漬物が好きだった人は残念だなんて思うかもしれないから、そんなことになる前にみんなで漬物ばなれのことを考えていったら、いい案が思い浮かぶと思うから少しでも早く工場Kの人に伝えたら、漬物ばなれが止まると思います。

教 師 道徳でにんじんのかざり切り勉強したいね。あの時どんなこと気づいた？

まさと 食べる人のことを考えているとか。

ゆかり 工夫がたくさんある。

教 師 例えば？

ゆかり 例えば、見た目とおいしさのことを考えていて、見た目でおいしい、おいしそうって思える。

ひとみ 見た目もよくて味もいい。

まき 味がしみこみやすい。

ゆうき つけものばなれが発生している中で、和食あるやん？寿司って外国でも人気あるやん？寿司って今の人の舌にあうけど、つけものは合わなくなってる。でも、昔の人のちえとかたくさんつまってるんやけど、今の人はそのおいしさに気づけなくなってマイナスだらけ。

教 師 今、ゆうきくんがマイナスだらけって言ったんやけど、アンケートを取った時にどんな意見があったっけ？

（「つけものを食べなくても問題ない」という意見を掲示）

けんじ あー。おった、おった。

教 師 おったよね。

ゆうき 全く問題ないわけじゃない。

教 師 漬物を食べなくても別に困らないし、問題ないんじゃないのって言ってた人いたよね。

今日休んでいるさとみちゃんは、「その通り」とか言ってたよね。

けんじ 食べてなくても別に困らんけど、つくっている人が悲しくなるっていうか。ぼくたちは問題ないけど、作っている人は問題になってる。

教 師 けんじくんはそう思うんや。

まき 自分は食べなくても何もならんやん？漬物工場の人はがんばって作っているのに、食べてもらえないのはダメ。

ゆうき 塩分が高くてさあ、たくあんとか栄養あるやん。大豆もそうやけど、塩分高なくて栄養が多いやつあるやん？納豆とか食べたら、栄養も自分の体にくるから、塩分高いのも好きっていう人もおるから、自分は困らんけど、工場Kでは栄養もたくさん入ってて、めっちゃがんばってるのに、気にしてないからダメ。

こうた 漬物は江戸時代からずっと続いている、健康にいいとか体にいいとか味がいいとかやから、今も残ってるやんか。味がよくないし体には悪いやつって昔の人がいらんっておもってるってことやん。今も残ってるってことは、自分たちが気づいていないだけで、漬物に残す価値があるってことなんよ。漬物だけにある特別な栄養とか。

授業記録では、あかねの「前、にんじんのかざり切りってやったやん？」という発言がある。この発言がきっかけとなって、子どもがこれまでの学習をふり返ることができ、漬物ばなれを止める理由として、こうたの「漬物は江戸時代からずっと続いている。…（省略）漬物に残す価値があるってことなんよ。」といった日本の伝統、受け継いできた食文化にかかわる内容の発言が出始めた。

第11時では次のような話し合いの場面があった。  
（第11時授業記録より）



ゆうた 今の人が漬物を伝えないと、村井の人に漬物が伝わらなくなると思っています。だから、問題はあると思います。

はると 漬物は食べなくても問題ないって、漬物は栄養あるし、長持ちするし、非常食にもなるし、好きな人もいるし、このまま食べなくなっちゃいけないと思います。

こころ 食べなくても問題はないんですけど、作っている人にとっては問題があって、和歌山の人が漬物を食べなくなって、和食も食べなくなって、いろいろな和食がなくなっていくと思います。

こうた 調べたんですけど、漬物って奈良時代っていう1300年くらい前からあって、今も続いているってことは、それだけ必要ってことで、漬物のいいところが大体の人に知られてないってことやと思うから、そういうことを知ってもらって買ってもらえるようにするっていいと思います。

けんじ 漬物を食べなくても問題ないって言うてる人は、自分は問題ないって思ってるけど、つくっている人の努力を考えるとなくなっちゃいけないと思うから、つけもの工場の人の努力を伝えていくといいと思います。

はると 漬物は昔から漬けてたやろ？今の人に責任があるっていうか、想いをこめて新しい人に伝えていくっていうのを昔の人はやってきたと思うけど、今の人が裏切って次の漬物を食べたい人が食べられなくなっちゃダメだと思う。

たけし こうたくんと同じで漬物は昔から続いているものやから。

ゆうき 漬物って栄養あるやろ？何回も言ってるけど、栄養があって、冷蔵庫なしで保存がきいて、今でも停電とかするやろ？実際に漬物は非常食として活用されているやろ？で、新しさもあるやろ？伝統を守りながら新しい味も作っているから、食べやすいと思う。だから、今の人は漬物のことを全然知ってなくて、ぼくたちやったら、伝統を守りながら進化してるってこと知ってるけど。

こうた 日本っていう文化があるやんか。日本独自の文化って和食があるから。和食って最近食べ物とかを自分たちでつくる機会って少ないやん。アメリカとかにたよってるから、和食がなくなっていくんじゃないかと心配。

第11時では、漬物の歴史的な価値についての内容が発言の中心になっている。これは、第10時のこうした発言「今も残ってるってことは、自分たちが気づいていないだけで、漬物に残す価値があるってことなんよ。」がきっかけになったのではないかと考察する。しかし、きっかけがあれば、みんながそうのように考え始めることができるとは限らない。このように次々に漬物の歴史的価値についての考えを話す子どもが続いていったのは、そのような価値を共有していたからであると考えられる。共有したからこそ、他者の考えを自らに引き付け、思考することができ、各々が自分ごととして学習に取り組めたのではないだろうか。と考察する。そのような価値を共有していた場面を考えると、特別の教科道徳の「にんじんのかざり切り」であり、特別活動の「郷土料理について知ろう」の学習が思い当たる。

したがって、第10・11時のこのような話し合いの場面では、特別の教科道徳や特別活動での学習が活用された結果であると考えられる。

## 5. 成果と課題

本実践において、オーセンティックな学習問題を設定することによって子どもたちが「自分に引き付けての思考や判断を進めることができる」ようになり、これらの事柄は社会科において重要となる「自分事になる」ことに結びついていくことが明らかになった。また、学習問題を設定する際には、子どもが解決の見通しをもつことができるかどうかということが大切であることも明らかになった。

カリキュラム・デザインの工夫については、教科等横断の視点で単元配列を工夫しておくことで、教科間で知識や価値を共有できるようになり、教科等を飛び越えて知識や価値の転移・活用を行うことでできることが明らかになった。また、クラスの中にそのような転移・活用をする子どもが見られたとき、共通体験・共通理解があることで転移・活用した知識や価値が学級全体に広がっていくことも明らかになった。

しかし、課題も残されている。オーセンティックな学習問題の設定については、学習問題の吟味の問題である。本実践においては、オーセンティック（真正の、本物の）という意味を現実の社会に実在する問題という意味で捉え実践している。実践して感じたことであるが、現実の社会に実在する問題であれば何でもいいわけではないだろう。子どもにとっての「オーセンティックさ」が重要なのだらうと考える。今後は、子どもにとってのオーセンティックな学習問題を設定するために学習問題を選定・吟味する視点を明らかにしたい。そうすることで、多くの教師がオーセンティックな学習問題を学習に位置付け実践することが可能になるはずである。

カリキュラム・デザインについても課題は残されている。それは、カリキュラム・デザインの工夫は子どもが知識や価値を転移・活用するための環境整備に過ぎないということである。子どもが安定的に知識や価値の転移・活用をしながら学習を進めるためには、別の手立てが併せて必要なかもしれない。安定的に知識や技能を転移・活用できる手立てを明らかにすることが今後の課題である。

## 参考文献

- ・澤井陽介(2015)「澤井陽介の社会科の授業デザイン」東洋館出版社
- ・澤井陽介(2018)「小学校新学習指導要領社会科の授業づくり」明治図書
- ・奈須正裕(2017)「資質・能力と学びのメカニズム」東洋館出版社